

明治中期各種旅館連合による 旅館案内の系譜と推進者

——新講社、改良組、同盟大旅館会の「定宿帳」を中心に——

Innovative Promoters of Mutual-aid Hotel Guidebook Publishing Issued by
Various Hotel Associations at Middle of Meiji Era

小 川 功
Isao OGAWA

要 旨

鉄道網が拡大する明治20年代から明治30年代までの私鉄勃興時代に、特定の企業や信仰を背景とせず、旅館業者同士の緩やかな結合による共済組織で「定宿帳」（同盟旅館の名簿類）を発刊した「一新講社」と「大日本旅館改良組」の形成過程を分析した。さらに同種の「日本同盟大旅館会本部」が刊行した時刻表『旅行独案内』と「全国漫遊の独案内とも云つべき有益雑誌」の『大旅館雑誌 旅客之樂園』の内容をごく少数の残存号を発掘して紹介した。明治31年10月発行した創刊号は一ヵ月前同一団体が創刊した時刻表の姉妹編ないし別冊特集といった性格を有する。鉄道に関する特異なまでの詳述傾向は『大旅館雑誌』発行所主事・赤井直道「漫遊者大中居士の实地視察感悟に因て起稿」した個人的嗜好によるものと判断した。最後に『大旅館雑誌』に掲載された「大旅館」がどのような旅館であったのかを数量的に検証し、京都・奈良・金沢の古都等での掲載旅館群のその後の栄枯盛衰の軌跡を探索した。

キーワード：一新講社、改良組、同盟大旅館会、定宿帳、大旅館雑誌、赤井直道、富坂保次郎、福住九蔵

1. はじめに

筆者の手元に粗末な一冊の旅館案内がある。携行の便を考えた小型本の中身の大半は全国各地から選定した当会推奨旅館の所在や概要を示した一覧で、巻頭には本案内発刊の辞があり、「旅館の選定を過つたばかりに、とんでもない憂目に遭遇」することを述べ、「若し不良旅館がありましたら御一報下さい」との注意喚起がある。もし筆者が当該旅館案内の刊行を誤って「明治15年4月」と伝えたら、読者は「〇〇講」などの「道中記」「定宿帖」の類かと判断されよう。確かに明治29年一新講社、並びに大日本旅館改良組本部が配布した〔写真-1〕の「定宿帖」冒頭を見ると、右側『明治二十九年改正 一新講社』では「若し賓客ニ接待不正ノ事ヲ為スモノアラハ…除社セシムベシ請フ投舎ノ諸君忌諱ナク旅亭ノ可否ヲ報告シ給ハン事ヲ」¹⁾、左側『明治二十九年撰定 大日本旅館改良組』でも「各地有名ニシテ最モ信用アル旅店を撰定」したので「投宿ノ諸君諱ナク各旅館ノ可否ヲ報告シ給ハン」²⁾と全く同趣旨の呼びかけを行っているのである。実は当該案内はなんと日米開戦前年の昭15(1940)年4月の発行であって、一新講社や改良組定宿帖発行の明治29(1896)年から約半世紀を経過している。

道中記収集・研究者・今井金吾氏によれば「道中記」は「主要幹線に鉄道がほとんど普及した明治三〇年代に入ったときには、その姿を消してしまった」³⁾と解され、発行主体の講社そのものも「わずかに木曾路に余喘を保っていた一新講社も、大正に入ると遂に姿を消」(今井別3, p199)したとされる。しかし青木助三郎の回顧でも戦前の駅前旅館同士で仙台と「宇都宮、日光、東京」(界限, p11)等とが青木が「けい」と呼ぶ「講」の名残と推測される「同盟をかたく守っ



〔写真1〕 明治29年発行の「定宿帖」

て、お客を送」(界限, p12) り合う「一連の同盟が結ばれ、緊密な相互扶助がなされていた」(界限, p10) との興味深い業界長老の証言もある。

当該案内の編纂母体「著名旅館好友会」は東京市京橋区横町の木戸ビル内に共同の「東京案内所」を擁して「皆統一のある連絡のもとで営業を致して居ります」⁴⁾ 任意団体であるが、果たして近世発祥の「講社」性をなお保持しているか否かは今後十分に吟味を要する。

筆者は苦難の旅を続ける旅人に幾何かの安寧をもたらす「道中記」「講社」など近世発祥の街道交通上の先人の智恵は鉄道の発達によって一挙に雲散霧消するものでなく、形を変え仕組みを転じつつ現代にも継承されている可能性を指摘したい。なぜなら鉄道の出現が旧街道の旅籠を産業遺産に転落させたのと同様、「道の駅」なる奇妙なネーミングに代表される旧街道側のリベンジ現象によって、高速道路の出現が旧鉄道施設を産業遺産に転落させつつある現在、鉄道旅行上の幾多の先人の智恵⁵⁾ も現代に継承されてしかるべきと筆者は思考するからである。加えて筆者は近世の講社組織の有する共済思想自体も近代企業の成立にさえも少なからぬ影響を与えたかも知れない事例⁶⁾ を個人的な経験からより深く承知するため、講社思想の継承如何にはある種のこだわりを有するが故でもある。三宅俊彦氏ら斯界の先行研究者に対しては勿論のこと、直接御教示を頂戴した中川浩一、宇田正、西城浩志、美濃功二、吉川文夫の各氏からのご厚情に深謝したい。また岩田秀行氏からは本稿に不可欠な鶏卵写真のご提供を受けたことを特記しておく。

2. 「道中記」「講社」研究に関する筆者の立場

旧街道の旅籠は鉄道の停車場前の新旅館に圧倒され姿を消したとの全体的把握が支配的である状況下、斯界の権威・大島延次郎氏の先駆的業績の域を逸脱することは後進には許されないのであろうか。経済史・交通史の視点に立脚する大島氏は昭和39年の著書で「鉄道が開通し、駅前には新装の旅籠が立並ぶようになると、一新講に指定されていた旅籠は、次第に新時代の落伍者になって…辺鄙な木曾路のような旧宿駅に、明治末年ごろまで、余喘を保つに過ぎなくなった」(大島, p302)、「従来、各種の講によって結成されていた旅籠は、新興の旅館の力に抗すべくもなく、落伍者になり、辛うじて辺鄙な旧宿場に、名残を保つに過ぎなくなった」(大島, p342) と極めて受動的に概観している。しかし個々の宿泊企業が鉄道の出現という環境変化に対応し、たとえば明治26年5月福島藤金本店が「汽車乗客諸君の御便利を計り、兼て停車場前に支店新築中の処今回悉皆落成」⁷⁾ した如く、駅前に新規出店し次第に駅前旅館に変身を遂げた個別資本の経営努力を一切捨象するような経済史的立場には筆者は組しない。地域によっては啓蒙的・開明的な旅館業者がむしろ大同団結して域内に新たな鉄道を主体的に導入・設立して地域振興に寄与した能動的事例も少なからず見られるからである。

また近世に成立した「道中記」の系譜は近代に入り、鉄道の発達の結果として徒歩による街道交通の衰退とともに、携帯に便利な懐中鑑、和装、木版刷の近世以来の伝統的な形式が印刷された洋書形式へと変化し、内容も指定の定宿帖から鉄道旅行の葉へと変容したと一般的に解されている。たとえば近世と近代の「旅行案内書」を合わせ、連続的に検討した山本光正氏「近代に至り明治二二年東海道線が開通すると道中記は姿を消し、鉄道沿線案内が民間の出版社から明治二〇年代後半より刊行されるようになる」⁸⁾と総括する。しかし定宿講の終息・消滅の時期、伝統的な「道中記」の衰退の時期等に関してはきわめて曖昧な表現にとどまっており、これらの退場とともに登場する代替品の担い手についても、官営鉄道・国有鉄道を除けば詳細な研究はまだまだの感がある。そこで筆者は鉄道網が拡大していく明治20年代から鉄道国有化で幹線系私設鉄道が姿を消す明治30年代までの、所謂私鉄勃興時代に限定して焦点をあてたい。この時期の広く旅行・観光に関係した書籍・雑誌・冊子類は大別して以下のように主たる目的に合わせて数種に分類できる。

- ①特定の鉄道沿線に限定した名所旧跡等の案内（＝「沿線案内」として定着。明治21年5月18日両毛鉄道発起人の中村伴蔵（毛野散士）が編纂し木村半兵衛が刊行した『両毛鉄道沿線案内記』の如く、私鉄自体ないし関係者が発行するのが通例。書籍の形での残存率は高い。）
- ②特定のエリアに限定した旅館の名称・情報等の案内（＝「定宿帖」の系譜。講社、同盟、組合等が刊行）
- ③全国規模での鉄道・汽船等交通機関の時刻表・運賃等の案内（＝「時刻表」として分化・発展。専門業者が運営。最新号のみ使用し、旧号は廃棄される運命）
- ④全国規模での名所旧跡等の案内（＝「案内書」または「旅行雑誌」。「旅行雑誌」は『旅』等を除き概して残存率は低い。）
- ⑤全国規模での旅館の名称・情報等の案内（＝「旅館録」。発行主体は区々）
- ⑥個別の名所旧跡・旅館・交通機関のみの簡単な案内⁹⁾

この分類ごとに史料としての残存状態に差異が認められるが、公共図書館等では観光業の発展を跡づける貴重な書籍としての認識が概して乏しく、一部の好事家・コレクターのもとに長年にわたって集積され続けた絵葉書、道中記、時刻表、沿線案内等例外的な品物を除けば、残念ながらほとんど組織的・体系的・機関的保存は実施されて来なかったと言えよう。そこで筆者は甚だ微力ながら当該時期に伝統的な「道中記」出版を担っていた定宿講勢力に代わって、どのような人物や集団が新しい時代の広義の観光案内誌の創設・改良に関わったのか、その一端を「大日本旅館改良組」「日本同盟大旅館会」等と名乗った講社の延長にある旅館結社等が当時作成したものの内で現物を入手・確認出来た数種の「加盟旅館名簿」類を個別・具体的に検討することで接近していきたいと考える。

言うまでもないが、近世発祥の「講社」の後身ないし類似団体は明治維新以降も引き続き各地

に数多く出現した。著名なものとして内国通運を背景とする「真誠講」や、伊勢信仰を基盤とする「神風講社」などがあり、先行研究の蓄積もある。今井氏によればこれらの講社群の多くは「明治末に消滅」（今井，p2）「誰でもが安心して泊まれる宿を紹介する講組織が、明治末か大正初め頃に消滅¹⁰⁾」（今井別3，p199）したと解されている。こうした講社群の中で特定企業・信仰を背景とせず、旅館業者同士の緩やかな結合体であって、かつ「判取帳」に相当する同盟旅館の名簿類を大正期まで発刊し続けた長期永続団体として、本稿ではまず冒頭写真に示した「一新講社」と「大日本旅館改良組」（次項）の2団体を取り上げよう。

なお、この種の案内誌とは別に明治20年代以降に鉄道企業、鉄道従事者、ないし鉄道緊密先等が主体的に編纂・発行した自社「沿線案内」類については鳥瞰図・小冊子・パンフ等調査対象が膨大な数量に上るため、筆者も数十年来探索・収集を鋭意継続中ではあるが、過去に発表した寸足らずの愚作¹¹⁾に見るように全貌をなお俯瞰できているとは申せず、機会があれば別途稿を改めたいと念じている。

3. 一新講社

(1) 一新講社の概要

明治6年頃興津清見湯（静岡市清水区）の脇本陣水口屋・一碧楼¹²⁾は時代の変化に応じて宿泊客の主なる対象を一般庶民に代えて、メインルートと想定した品川宿から伊勢に至る沿道優良旅館の組合組織として「一新講社」を結成、たとえば明治11年9月『明治十一年九月改 一新講社』（大坂道頓堀戎ばし大和屋彌三郎）等を順次刊行するなど、「常に旅客の便を考えた新方針を打ち出した」（今井44，p410）とされる。当時は秋葉神社が多くの参詣客を集め、顧客を確保していた静岡県内から他にも文明講、栄世講などの講が前後して出現している。明治の元勲・伊藤博文、山県有朋らも風光明媚な興津を度々訪れ、この水口屋で投宿した鼻肩筋であった。「一新講社」取締には遠州袋井駅の本多留平¹³⁾らが就任し、講の発展に尽力した。

明治22年の新聞小説の一節に「帳面は大戸棚の横手へ一新講の宿札のやうに掛け並べ」（竹の舎主人『擬博多』M22.7.23 読売③）との表現が商店の描写場面に使われるなど、目立つ「一新講の宿札」が「掛け並べ」る代名詞となることから「一新講社」隆盛の程が窺えよう。また当時の錦絵新聞でも「東海道を往来せば大教院の定宿なる一新講社の判取帳を求めて其表札ある店に休泊すべしと評判の高きも理なり」¹⁴⁾と一新講社の評判を記している。

一新講社の趣旨、組織、役員、最寄惣代等の主要構成員が記された明治23年の「一新講社広告」の全文を資料として以下に引用する。なお原文に加えて▲印は区域役員、○印は一新 M29

(判取帳)に記載あり、△印は別組織である「改良組」(後述)の改良M29にも重複して記載ある宿を示した。

「○開 一新講社広告 世運日に月に旺盛に赴き陸に鉄路の便あり、海に汽船の利あり。覇旅の頻繁益々加はる。是に於てか吾等旅舎業たるもの旅客の便益を謀り此業の隆盛を冀ふは当然の務也。殊に吾等同業者は曩に一の団体を結び一新講社と名づけ以て大日本全国至る処皆旅客を遇する篤実に丁寧に一意は従へり。故に我社の名誉弥々高く顧客の信用益々深し。豈勉めざるべけんや。由て吾等将来の方針を議らんが為、去五日全国社中大集會を東京に開きしに参会者も意外に多く議事も大に撈取り、実に未曾有の大盛會なりき。扱当日は全国社中を四大区域(東京左右を一区域。中山道利根川界より越後地方を一区域。東海道阿部川より以西京坂地方を一区域)に分ち、第一回を本年本月東京に、第二回(明治二十四年度)を中山道に、其他一区域毎に年々十月大集會を開設し時事の必要を商議し、各自の新智を交換せんことを締約せり。此段全国社中諸君に広告す。旅人宿營業一新講社大集會發起人 但当日役員及最寄惣代として参会せし人名左の通。(イロハ順)」(M23.11.12 東朝③)

發起人のリストは「表-1」に掲げる。

前年予告通り的一新講社の「第二回(明治二十四年度)中山道区域大集會」に相当する「全国一新講社の総會」記事を以下に掲げる。

「全国的一新講社旅人宿は一昨日長野県長野町城山館樓上に総會を開く。會なるものは西は京阪地方、伊勢、名古屋、東は東京、横浜、水戸、奥羽地方、日光、宇都の宮、中仙道筋群馬、長野、新潟、富山、石川の数県に涉り、出席員百六十余人にて群馬県人吉田藤七氏を以て議長の任に充て、第一 旅の便、第二 營業上の注意其他数ヶ条を議決し、十分に将来のことを評決し、終て役員の公選をなせしに左之如く当選せり」(M24.10.24 読売②)

役員は吉田藤七(前橋堅町 松坂屋)、福田与重(伊香保)、岡田源兵衛(高崎)、扇屋金四郎(長野、五明館)、上田宇源治(軽井沢)、住吉屋栄六(新潟)(M24.10.24 読売②)であった。

6年後の明治29年時点のリストとの比較では次項で取り上げる改良組等の他講社への乗換・引き抜き等の結果なのか、高崎・前橋地区の大量退社が目立つ。その主要メンバーが以下の中山道区域の役員であるから、組織内部に何らかの根深い問題があった可能性を示唆している。たとえば既存の「改正浪花講」、「一新講社」等と競合していた「真誠講」の場合でも、「浪花講の定宿帳を他の講のものを取り替え、他の宿に誘う者が多い…続出した類似講との激烈な争いが多かった」(今井44, p403)という。明治26年改正の「真誠講社」定宿帳の中には三島の「かじや」(今井44, p339)の左欄、岩淵(今井44, p339)、江尻の「川むらや」(今井44, p340)の右欄、かけ川の「中島屋」(今井44, p341)の左欄の黒塗りの削除箇所が存在は定宿帳改版作業中にも競合の激しい静岡県下等で除名ないし脱退が続発していたことをうかがわせる。

一般に「明治末に消滅」(今井, p2)したと解される中、一新講社は遅くとも大正5年ごろま

明治中期各種旅館連合による旅館案内の系譜と推進者

【表-1】 一新講社大集会発起人（明治23年11月）

東京南紺屋町	○和泉屋健藏
仙台停車場前	○奥田正吉
日光鉢石町	○大野屋重藏
武州堀ノ内	大蔭屋平四郎
高崎新町	岡田屋源三郎
東京神田久右衛門町	津久井屋善太郎
武州府中	中屋平兵衛
前橋曲輪町	中藤屋惣五郎
東京馬喰町	○梅屋治兵衛
東京上野停車場前	○群玉舎吉川セイ
横浜住吉町六丁目	○山崎屋啓二
前橋堅町	▲松坂楼吉田藤七（松坂屋藤七）
東京浅草観音前	○松坂屋松次郎
横浜弁天通五丁目	○福井忠兵衛
函根湯本	○福住九藏
東京浅草橋際	○丁字屋ヨシ
前橋停車場際	▲鉄泉亭堀内栄吉
東海道川崎	○浅田屋武右衛門
日光鉢石町	○油屋長三郎
相州金沢	○東屋金次郎
伊勢山田	○北村屋甚藏
相州鎌倉	○三ッ橋与八
横須賀	○三富屋利右衛門
東京馬喰町	下総屋文藏
相州江ノ島	○江比須屋茂八
高崎本町	越後屋源兵衛
仙台国分町	瀬戸勝次郎
東海道沼津	▲杉本和平
高崎停車場前	▲寿美余志富貴寿

（資料）M23.11.12 東朝③

で道中記の形式を踏襲し刊行し続けた。『大正五年改正 一新講社』裏面は縦横に張り巡らされた鉄道網と併存する形で描かれた旧街道の宿駅所在地を描く道中絵図になっていることから、鉄道黄金期の大正中期になお厳然として「道中記」の系譜に位置づけられる定宿帳が存在していた

れ、彼らが上野駅前の群玉舎で開催される会合に度々出席していた様子が判明する。吉川セイが主人の群玉舎は「営団本部ビル」（現東京メトロ本社）の南側という便利な場所にあり、「群玉舎旅館 東京上野停車場東門の出口に在りて、演車乗降の便最も宜しく、旅舎をして甚だ恰好の地位を占め」²¹⁾、東北方面からの観光客に親しまれた。²²⁾ この一新講社での遠藤（福島）と吉川（上野）の関係と同様の構図が次項の改良組の首脳部でも見られる。

4. 大日本旅館改良組

(1) 改良組の発起

次に明治25年6月ごろ東北本線中心駅仙台の大泉梅治郎ら、東北筋の旅館主を中心に「大に旅館改良の率先を為さん」と当初は数十館程度で組織し「大日本旅館改良組」（以下改良組と略）と名乗った団体を取り上げる。中心人物の一人大泉梅治は「熱心ナル旅館改善主義者ニシテ、客ヲ遇スル誠実」（要録, p73）と評された仙台の有力旅館主で、松島の大宮司雅之輔²³⁾など近隣旅館主と連携し、旅館の改良、旅行団体の組織、回遊列車の運行等を創始・実践した先駆的な観光デザイナー²⁴⁾の一人と筆者は考えている。

筆者が確認できた改良組の創設記事は以下の通り。

「大日本旅館改良組…大に旅館改良の率先を為さんため爾來其事に着手せしが、今度、針生、安藤、日光の小西、善光寺の藤平其他各地有名の旅店主人と相謀り掲題の如きものを組織せしに、加盟者追々増加するを以て明後二十七日を期し上野公園八百膳楼に於て大懇親会を開き組合規約等を議定する都合なりといふ」（M25.6.25 東朝②）

続報として「旅館改良同盟懇親会…二十七日午後六時より上野桜雲台に於て掲題の会を開きしが、各府県同業者の来会せしは五十余名にして、席上其改良の方針及び方法を協議し午後十時前後散会せし由」（M25.6.30 東朝②）とある。

7年後の明治32年7月5日にも「東京各旅人宿改良大懇親会 明五日上野梅川楼に開く」（32.7.4 読売②）との記事があるので改良組は毎年7月「懇親会」の名前で会員総会を多くを占める東北方面の組合員に便利な上野周辺で開催していたものと思われる。

同懇親会開催直後の明治25年7月16日に改良組東北部から「東北本線時刻表」²⁵⁾と添付された[表-2]の会員名簿が発行されたことから、改良組は明治25年6月27日正式に結成され、地域組織として少なくとも当初から「東北部」が存在し、少なくとも50館以上の加盟旅館を有する、後発ではあるが中堅以上の規模を有する同盟組織であったと考えられる。

こうして東北本線沿いにまず加盟旅館を拡充し、以後次第に領域を拡大したものと思われる。

【表-2】 大日本旅館改良組の会員名簿（明治25年7月）

東京上野	○山城屋支店 ○大坂屋長左ヱ門 岡島純吉 大東屋万二郎	松島	○観月楼
		石越	○石越屋
		一ノ関	○石橋清蔵 ○亀屋万右ヱ門
小山	○角屋満司	黒沢尻	○金沢ます 野村仁助
前橋	○鉄泉亭	盛岡	○清風館 村田儀二郎 瀬川守之助
高崎	○寿美余志富喜寿	福岡	○黒沢繁右ヱ門
水戸	○伊勢屋彦六	尻内	○浅川良助 △江渡邦之介 △中村朝次郎
日光	小西屋喜一郎 ○神山徳平	野辺地	熊田卯兵衛
宇都宮	○ての字 白木屋支店	青森	○早瀬由右ヱ門 ○中嶋政吉 塩谷斎太郎 ○山崎春吉 △鍵屋支店
白川	柳屋博二 ○勇屋裕八	函館	○勝田弥吉 ○中村茂七 ○和田唯一 ○岡七郎兵衛 △納代東平
本宮	佐藤平八 ○境屋安兵衛		
福島	○上野屋安次郎 伊藤屋保四郎		
白石	△菱野屋留治		
大河原	△大庭喜七		
仙台	○大泉梅治郎 安藤利兵衛 停車場前 安藤支店 ○同 大泉支店		
塩竈	海老藤蔵		

（資料）鈴木誠三郎「東北本線の時刻表及び料金表」大日本旅館改良組
 東北部、明治25年7月16日

なぜなら4年後の『明治二十九年撰定 大日本旅館改良組』の名簿は前半の充実した旅館網からなる東日本編（毛筆による道中記）と後半のまばらな東海道編（活字による書籍）の異質同士の合冊（「東北部」などの地方組織ごとに作成した常宿帳の綴り合わせ）であり、明らかに後半部分が弱体且つ制作年代が新しい。おそらく明治29年以前のある時期に東海道筋（ただし参宮まで）の別の小規模な講社との統合が行われた結果、「大日本旅館改良組勢部」²⁶⁾が成立したのであろうかと推測される。また定宿帳『明治三十二年撰定 大日本旅館改良組』の著者が「改良組関東

部」ではなく、「関東改良一新講社」と名乗ることから考え、新興の改良組と既存の一新講社とは趣旨に類似点があり、構成員に何らかの共通点（たとえば大量脱退・乗換）が存在した可能性もあろう。

改良組の創意工夫の一例を挙げれば「旅館改良組」印と加盟旅館の「松葉館」（直江津アラ川端）の朱印が押された「新潟県改良組乗車券」の存在である。「大日本旅館改良組が印刷し、宿泊先の加盟旅館が取扱人として乗車券に…松葉館といった各旅館印を押して顧客に配付した」²⁷⁾ サービスと解されている。

(2) 中核を担った人物・山城屋支店富坂保次郎

前項の一新講社で遠藤（福島）と吉川（上野）の関係で考察したと同様に、改良組が東北部のみのローカル組織を超え全国規模の団体へと飛躍するためには何よりも東京での拠点旅館、それも東北在住組合員が集結しやすい場所²⁸⁾が必要である。『風俗画報』は日本鉄道「上野停車場に面し、繁華の地なり、旅舎、飲食、雑貨店多し」²⁹⁾として、先の群玉舎を始め、山城屋（富坂保次郎）、角田（角田鐵治）、恵比須屋、金井旅館、岩瀬館等多数の旅館を列挙する。その中でも日本鉄道運輸課乗客掛長桜井純一が編纂し博文館から定価45銭で販売された『日本鉄道線路案内記』に「山城屋支店上野ステーション前」³⁰⁾と紹介され、巻頭広告でも「支店上野停車場前本店馬喰町二丁目」³¹⁾と便利な支店の方を重視していた山城屋彌市支店を任されていた富坂保次郎が明治25年結成当初の改良組の名簿（前掲「東北本線の時刻表及び料金表」）の筆頭に位置し、中心的役割を果たした。即ち「山城屋支店 富坂保次郎」³²⁾は「街道筋旅館改良組々長となり界に貢献」³³⁾したのである。富坂保次郎と大泉ら東北勢との深い交流は明治30年代大泉らが主催者となって幾度も造成した遊覧旅行募集で中核を占める東京申込所として山城屋支店³⁴⁾が大きく貢献していることからもうかがえる。

改良組の拠点旅館の上野駅前山城屋支店は、「開業明治十三年、A客和風三階建客間三十二、客上中並、宿料一円十銭、一円半、二円、三円、上野駅前下谷町二丁目山城屋支店 電話下谷一三六三番 館主富坂保次郎」（要録 M44, p8）であった。旅館としての構造は「同業中其の屈指にして、三室の西洋間あり、湯殿の如きも西洋風をなし、理髪所の設けもあり。設備至り尽せる事内外の止宿人の共に満足せる所なり」³⁵⁾と大日本旅館改良組の本領を発揮し、創意と工夫を重ねた改良の成果を誇っていた。

山城屋弥市³⁶⁾の次男・「富坂保次郎君 君は東京の人遠藤弥市氏の二男にして萬延元年九月を以て生れ、後富坂姓を襲ぐ。現に山城屋支店と称し、旅館業を業とす。夫人をきん子と呼び四男一女あり電話下谷一三六三」³⁷⁾、富坂保次郎▲16.88円、△87.00円（日韓上, p332）

少し長文であるが、中心人物・富坂保次郎の履歴を引用する。「君は萬延元年九月を以て東京

市日本橋区馬喰町に生る。君が生家は代々旅人宿を営み居たりき。而して君が厳父は十一代目の山城屋、遠藤弥市氏にして君はその次男なり。幼にして丁稚奉公をなし、辛酸具さに嘗む。後漢學を修む。たまたま良縁ありて君は富坂家に養子となり、其の姓を襲ぐ。明治十七年現在山城屋の支店を出し、勤勉実直寢食を忘れ、殆んど夜を別たず。かくて臥薪嘗膽の結果漸くあらはれ、家業は愈々隆盛を來し、漸く富裕の域に達せんとする際、天はこの人の更らに為すあるべきを見て、再び際する艱難の試練石を以てせり。即ち明治二十八年、不意の火烟は君が隣家より起りて、見る見る君が家は類焼の不幸を見るに到り、多年辛苦の賜たる家財什宝尽く烏有に帰し、君は再び赤裸の人となり…奮ひ闘ひ遂に再び君が今日の盛運を見るに到りぬ。…開店以來星霜を閲する三十余年、其間君は街道筋旅館改良組々長となり斯界に貢献せる所尠からず。現に東京旅人宿組合常任幹事の職にあり、明治四十年以後下谷区々會議員として区政に尽せり。(下谷区下谷町二〇六、電話一三六三)」³⁸⁾

5. 『大旅館雑誌 旅客之樂園』

(1) 明治31年創刊号の内容

〔写真-3〕の『大旅館雑誌 旅客之樂園』第1號は「大旅館雑誌は、漫遊者大中居士の实地視察感悟に因て以て起稿したる、旅行者必携の、枢要雑誌にして、掲載する記事は、旅に関する散文、寄書、雑報、雅文、和歌、新体詩、狂歌、俳句、各地優等大旅館に到る迄、皆旅行に関するものを掲ぐ。殊に旅行者に安心と、便宜を与へんため、確實に全国大旅館の所在地は勿論鉄道停車場、汽船碇泊場、各沿道の名所古跡、神社仏閣、温泉場、海水浴場、其他細大となく表示したれば、全国漫遊の独案内とも云つべき有益雑誌なり」(裏表紙)と宣伝した。

「大旅館雑誌発行所」は東京市浅草区駒形町64番地にあり、「発行兼編輯者」赤井直道(東京市本郷区本郷弓町25番地)は「大旅館雑誌発行所主事 大中居士」(p2)と名乗る文人であった。赤井直道は明治40年時点でも旧藩邸に近い「本郷丸山新町二十六」³⁹⁾に居住する旧金沢藩士らしいとしか判明しないが、子息や孫に小兒科医、四高教授、新聞記者⁴⁰⁾が現れることから本人の才能もかなりの程度かと推測される。「発行之趣旨」の中で大中居士は「所謂『クワ井ードブック』の必要を感じ、先づ全国中優等の旅舎を撰択し、之を世に紹介して、一般旅行者の便益に供するため、『大旅館雑誌』を發行」(p3)したと述べた。

巻頭を飾る「祝詞」を寄せた松園主人⁴¹⁾なる人物は松園梅彦と思われる。松園梅彦(松園大人、松園主人)は本名四方正木、『五国語箋』(白杵太郎蔵板、製本所禁幸堂菊屋幸三郎、万延元年)等を著した人物とされる。



【写真-3】『大旅館雑誌 旅客之樂園』第壹號、
明治31年11月28日印刷

また第一号の寄書として「快きかな汽車の旅、楽しきかな、汽車の旅」(p4)と鉄道旅行を礼賛する「汽車賦」を寄稿した文人・梅本塵山⁴²⁾は「漫遊者大中居士」の同好の仲間と思われ、明31年6月東陽堂から『浮世絵備考』を出した梅本鐘太郎(塵山)という当時著名な文人であった。

投書として相馬中村町の「最上屋」⁴³⁾、広告を掲載したのは讃岐鉄道、大阪商船(中国九州航路概略)、山陽鉄道(案内概略)、九州鉄道(案内概略)、豆相人車鉄道(人車鉄道の案内)、全国新聞一覧表等であった。旅館広告⁴⁴⁾としては津市の若六、神戸市の千秋樓であった。

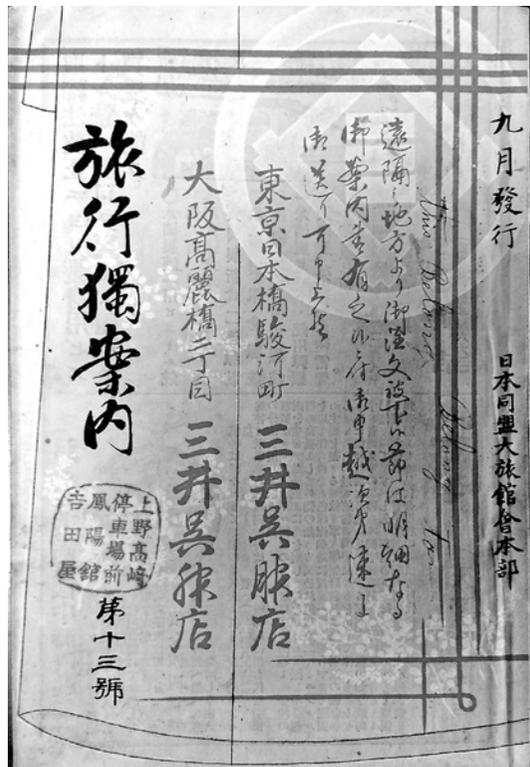
また筆者が長野県内の古書店から購入した第一号の表紙には「はぎ乃」、裏表紙には「長野市大門町 旧本陣 対旭館 藤屋旅店」⁴⁵⁾の朱印が押されるなど、日本同盟大旅館会の会員が本部より一括購入⁴⁶⁾して県内の顧客等に提供したことを窺わせる。なお『日本大旅館誌』は第2号まで104頁、18.5cm×13cmという同様な体裁で日本全国漫遊の獨案内書として発行が継続されたことは確認できたが、その後の消息は未詳である。発行人は木村喜太郎(次項)であった。

(2) 日本同盟大旅館会本部

『大旅館雑誌』第1号の表紙には「大旅館雑誌発行所」の看板と「日本同盟大旅館会本部」の看板とを掲げた二階建ての商家が描かれている。この一心同体と思しき日本同盟大旅館会本部は明治29年5月ころ『日本同盟大旅館 主意書』を作成、同志の一人と目される宮島の岩惣旅館⁴⁷⁾は明治29年5月華客の名古屋財界の首脳・神野金之助・富田重助の本拠・神富殖産会社宛に差し出している⁴⁸⁾。

日本同盟大旅館會は機関誌として[写真-4]の木村喜太郎編『旅行獨案内』を定期刊行していた。

「全国漫遊の独案内とも云つべき有益雑誌」の『大旅館雑誌 旅客之樂園』と並行して、日本同盟大旅館會本部が『旅行独案内』を出していたとみられる。明治32年9月発行の『旅行獨案内』13号の巻頭言には「吾が同盟旅館の機関たる本誌は…爰に大々の改良を施さざるの止むを得ざるに会せり」(p1)として、『旅行独案内』が日本同盟大旅館會の機関誌たることを明らかにしている。奥付によれば、明治31年2月22日通信省認可、明治31年3月7日内務省許可され、日本同



[写真-4] 木村喜太郎編『旅行獨案内』第13号、明治32年9月

盟大旅館会本部の住所は東京市浅草区駒形町 64 番地から東京市麹町区飯田町 5 丁目 30 番地に移転、「編輯兼発行者 木村喜太郎 印刷者宮謙」であった。編者の木村喜太郎は知守庵為谷と号した俳人で、三森準一（桂窓準一）と組んで明治 40 年潮花吟社から『明治発句題林』を出している。

日本同盟大旅館会本部は少なくとも明治 32 年 11 月『旅行独案内』15 号を発行したことが三宅コレクションから知られる。三宅氏は「誌名は古くささを感じさせるが、明治 31 年 9 月創刊の月刊『時刻表』である。発行所は全国組織の旅館組合で、名所案内の頁にもさりげなく加盟旅館の広告が入っている」⁴⁹⁾と解説する。それ以降の発行実績は管見の限りでは存在が確認できない。ただし大正 4 年 2 月号の時刻表「八ノ戸若松ホテル広告」には「八ノ戸 若松ホテル 大日本同盟旅館 軍馬購買官御定宿 東京富貴会指定旅館 鉄道院御指定旅館 館主 若松与一 電話七三番」⁵⁰⁾と同館がなお「大日本同盟旅館」の看板を掲げていたことを推定させる。また盛岡市六日町の高与旅館（中村与助）も「盛岡日本同盟大旅館 主 中村与助…鉄道院御指定旅館 高与旅館 電話二六番」⁵¹⁾と同様に広告を出していることから、『旅行独案内』の継続有無は別として日本同盟大旅館の組織は少なくとも大正初期までは機能していたと考えられる。

6. 『大旅館雑誌』創刊号掲載の旅館の紹介

「発行之趣旨」で編者・大中居士は「先づ全国中優等の旅舎を撰択し、之を世に紹介」する『クワ井ードブック』であると述べるが、「優等の旅舎」ないし「大旅館」の具体的要件に関する記述は見当たらない。実は筆者が『大旅館雑誌』入手以前から、何らかの特色ある旅館（ないし経営者）と感じて過去に拙稿⁵²⁾で紹介・言及済みのものが 10 館近く存在する。『大旅館雑誌』に掲載された「大旅館」がどの程度の規模の旅館であったのかを検証することとした。掲載旅館の中で比較的規模が大きく、都市部に立地し、比較的近い年度の営業税・所得税が入手可能なものを任意に一部抽出したのが [表-3] である。（もとより悉皆調査は不可能）営業税、所得税とも 100 円、客室数も客間 100 クラスは全国的に見ても堂々たる「大旅館」であって、営業税 5 円、所得税 20 円、客室数 15 程度が中堅クラスといったところであろうか。

以下、ほぼ全国を網羅し外地台湾島 12 館を含め約 583 館（うち東京 106、三重 25、新潟 23、愛知 21、京都 21 館）もの大量の掲載旅館の中から、既に拙稿で紹介済みのものを除き、紙面の制約から戦災に遭わず、比較的面影を偲び易いと考えた古都・京都・奈良・金沢等の都市旅館・ホテル等を取り上げ、いかなる「優等の旅舎」かを紹介したい。尤も古くに廃業するなど、資料が皆無な無名の館も少なくない。結果的に紹介可能なのは現に盛業中で多く情報発信されるものに偏ったかもしれない。長く永続できた館は当然顧客に評価されたはずであり、究極の「優等の旅舎」といえなくもなかりう。

【表-3】『大旅館雑誌』掲載旅館の規模

館名	営業税	所得税	客室数
○小西別荘 日光	▲ 228.64 円	△ 237.04 円	
○京都ホテル	▲ 188.10	△ 396.79	客間 100
○大浦屋 金沢	▲ 97.75	△ 46.76	客間 25
○仙台ホテル大泉	▲ 80.00	△ 132.04	
○対旭館 長野	▲ 67.62	△ 93.00	客間 98
○菊水楼 奈良	▲ 60.22	△ 177.00	客間 35
○浅田屋 金沢	▲ 56.21	△ 25.35	
○春帆楼 赤間関	▲ 49.30	△ 14.00	客間 15
○雨夜又五郎金沢	▲ 44.90	△ 32.60	客間 15
○柗屋 京都	▲ 38.59	△ 39.82	客間 50
○吾孀館 中之条	▲ 25.58	△ 11.80	
○萬屋 京都	▲ 24.90	△ 32.16	客間 15
○魚佐 奈良	▲ 23.21	△ 48.00	客間 21
○竹田猶吉 金沢	▲ 22.07	△ 21.17	
○俵屋 京都	▲ 21.87	△ 41.78	
○武蔵野亭 奈良	▲ 20.00	△ 30.00	客間 26
○大文字屋 奈良	▲ 19.50	△ 43.00	客間 35
○住吉屋旅館金沢	▲ 18.90	△ 18.33	
○犀北館 長野	▲ 17.50	△ 31.00	
○山城屋支店	▲ 16.88	△ 87.00	客間 32
○松吉 京都	▲ 15.00	△ 25.88	客間 18
○高与 盛岡	▲ 10.47	△ 25.92	客間 29
○群玉舎	▲ 9.55	△ 47.00	客間 32
○鳥居楼七条	▲ 6.48	△ 23.60	
○平田タミ 京都	▲ 4.19	△ 20.38	
○樋口館 京都	▲ 3.20	△ 15.32	
○海老屋支店	▲ -	△ 43.50	客間 10
○大阪ホテル	▲ -	△ -	客間 30
○三好野花壇岡山	▲ -	△ -	客間 25
○陸奥ホテル仙台	▲ -	△ -	
○花岡 大館	▲ -	△ -	
○萬翠楼福住九蔵			客間 50 余
○吉野屋 山中温泉			客間 46
○祇園中村楼			客間 40 余
○杉本ホテル有馬			客間 39
○芝浜館			客間 25
○東海ホテル			客間 25
○芝浦海水浴旅館			客間 23
○那須湯本小松屋			客間 20
○清水屋 会津若松			客間 20
○八戸 若松ホテル			客間 14
○津 若六			
○神戸 千秋楼			

(資料)『大旅館雑誌』、▲営業税・△所得税は『日韓商工人名録』
実業興信所、明治41年(主要都市のみ収録)、客室数は
『旅館要録』東京人事興信所、明治44年等による。

(1) 京都の洋式・半洋式旅館・ホテル

京都府の収録が21館と多いため洋式に限定した。『大旅館雑誌』には和式旅館のほか、純然たる洋式ホテルに加え、和洋折衷の半洋式や、「日本座敷を洋室に改造」したり、「ホテル式営業」、四條畷駅の「畷ホテル」のように一応「ホテル」と名乗るものなど、雑多な形態が掲載されている。明治30年代初頭という移行期ゆえ、業態が確立していなかったものと見られ、写真、和洋室の区分が掲載されていないため、本当に洋式ホテルであったのかどうか掲載館の実態は残念ながら未詳である。

①也阿弥ホテル

現在の円山公園になる円山には安養寺塔頭である多蔵庵春阿弥⁵³⁾、延寿庵連阿弥、花洛庵重阿弥、多福庵也阿弥、長寿院左阿弥、勝興庵正阿弥があり「円山の六坊」「六阿弥」と称された。正阿弥等の塔頭、僧坊は遊覧酒宴の宿、貸席、料亭に変容した。明治6年9月明石博高が湯治療を目的に金閣寺を模した三層楼の「人工温泉」吉水温泉⁵⁴⁾を開業して人気を博した。

嘉永二年料亭を始めた左阿彌（館主辻重左衛門）は明治維新以降、御前会議にも使われ、「六阿彌のうち左阿彌のみが今に至るまで料亭として残り」⁵⁵⁾ 現在も盛業中である。しかし二度も火災に遭った京都の洋式ホテルの先駆・也阿弥ホテルは忘れられた存在なので、その不幸な歴史を紹介しておく。特に末期の再建・破綻の繰り返しの真相はよく判らない部分が残る。

明治5年3月也阿弥ホテル開業（百年，p18）

明治12年井上万吉（弟の井上喜太郎が京都ホテルの創業者）が也阿弥、連阿弥、重阿弥など三坊を買収して也阿弥ホテルを開業した。「也阿弥、左阿弥、正阿弥等の旅館あり、今は也阿弥のみ繁昌して他の数軒を圧倒するものの如く、館は外国ホテルの風に倣ひ専ら外国人を客とす」⁵⁶⁾と近代ホテルへの変身をはかり、『日本ホテル略史』では「ガイド出身の長崎県人井上万吉、京都円山公園内に也阿弥ホテルを建設す。即ち安養寺の三坊（端ノ寮、連阿弥、也阿弥）を買収し、日本座敷を洋室に改造、室数四十、照明は石油ランプ使用、室にはドアなく、カーテンにて仕切る。滞在客全部外国人故洋食を提供す。料金 三食付 一人一泊 前面室 三円 内側室 二円五十銭」⁵⁷⁾

明治24年版『マレー日本案内記』所載。

明治25年1月円山也阿弥楼が正阿弥楼を買入れ拡張⁵⁸⁾

明治32年3月25日円山公園也阿弥楼火災⁵⁹⁾（M32.3.29 東朝）

明治34年6月京都下京区「明治三十四年円山也阿弥ホテル再築の議起り、私に尽力を依頼…万難を排して、漸く之を建築し、也阿弥ホテル株式会社と称し、私が社長に当選した」⁶⁰⁾。也阿弥ホテル(株)設立（諸上，p249）

明治36年版『チェンバレン日本帝国小史』所載。

明治39年4月再度焼失。「同ホテルは去る三十二年三月二十五日…祝融の見舞ふ所となり…三十四年会社組織とし…現今の建築を見るに至りしに慮らずも今回の災厄に遭ひ」(M39.4.20 読売③)「随分苦勞した建築物も惜い哉全部焼失してしまつた。従つて同社の業務も一頓挫を來した」⁶¹⁾。

明治45年7月20日也阿弥ホテルの後継者に貸下げ新社設置案浮上、他に円山「旧温泉跡…の敷地貸下げを出願…店の設置を許可」(M45.7.21 日出①)かと観測

大正3年7月時点では也阿弥跡は廢墟 (T3.7.24 日出⑦「スケッチ円山公園」)

大正4年8月30日円山公園地に也阿弥ホテル合名会社設立(帝, p26)「旅館兼料理業、資本金2.5万円、代表出資社員西川正雄 11,500円、出資社員山本米蔵 13,500円 (T4.9.9 日出⑧登記)

大正5年9月16日(名)也阿弥ホテル「総社員ノ同意ニヨリ」解散 (T5.9.20 日出④登記)

大正10年7月也阿弥ホテル設立 取締役春名昇(要 T11, p15)

② 祇園石鳥居前 中村楼

中村楼は下京区日山町、辻重右衛門経営(商 M31 ろ, p84)、明治初年榎村知事時代 中村楼旅館割烹創業 二代目重三郎 八坂鳥居前を払い下げ(大鑑, p270)

井上喜太郎からの聞き取りと思われる日出新聞の「京名物(八十一) 京都ホテル主 井上喜太郎氏」の記事では「明治八年頃中村楼の辻重サンが知恩院の座敷を借つてホテルを始め」(M43.7.2 日出)た。『日本ホテル略史』では「京都の料亭中村楼明治初年の頃、二階建の新館を設け、ペンキ塗の簡単な洋間八室を作り、外国人を宿泊せしめ、明治四十四、五年頃迄ホテルを営業せり」(略史, p4)

1881年のハンドブックには京都のホテルとして自由亭、也阿弥とともに中村屋が記載されている。1891年のハンドブック第三版にも二軒茶屋とも呼ばれる中村屋が記載されている。

「客間40余(要録, p37) / 時期未詳 中村家 創業 出雲・左右衛門 八坂神社前」(大鑑, p270)

(2) 奈良の老舗旅館

奈良県には14館うち奈良の旅館として①今御門町の魚佐、②春日鳥居前の菊水楼、③三笠山麓の武蔵野亭の3館(p68~p69)が掲載されている。

① 今御門町 魚佐

まず「ならのやど魚さ 別座敷ちん流亭」と読める[写真-5]の岩田秀行氏所蔵鶏卵写真(厚手の台紙に添付)は1832年(文久2年)創業と伝わる客間21室の魚佐旧本館(昭和42年取壊)である。平成24年4月筆者に現物を示された岩田氏によれば蒐集対象である相当古い「明治の役者の鶏卵写真の中に、1枚だけ旅館ものが混じつて」いた由である。現代写真の如き解像度はなく、原色の黄色の経年退色が進んでいるが、当時極めて希少性が高く高価な鶏卵写真を使用して、



【写真-5】『ならのやど魚さ 別座敷
ちん流亭』（鶏卵写真）

歌舞伎役者を最頂とするような華客に贈呈した「優等の旅舎」魚佐の高級な宣伝政策、客層が窺える観光史料と考え、岩田氏の許可を得て掲載させて頂いた。

三島康雄氏は『奈良の老舗物語』に同じ構図の昭和42年改装前の写真を掲げ、「講社の指定旅館としての役割が経営上に大きな意味を持っていた」⁶²⁾と指摘している。魚佐経営者の金田栄蔵⁶³⁾（今御門町）は旅人宿兼料理▲23.21円△48.00円（日韓上, p8）（要録, p42）であった。多くの案内書に登場する著名旅館で、年代順に挙げれば、明治9年「奈良 今御門丁 魚屋佐兵衛」⁶⁴⁾、明治21年「なら 今御門丁 うをや佐兵衛」（一新 M21）、明治29年「なら うをや」（一新 M29）とあり、明治44年「和風二階二十一 泊六十銭、八十銭以〈上〉魚左 猿澤池畔 館主魚屋左平」（要録 M44, p42）、大正5年「奈良 いんばんや庄右エ門 魚屋佐平 南都名所 又神武天皇吉野高野山各名所 宿ヨリ委シク御案内仕候」（一新 T5）

②春日鳥居前 菊水楼

次に菊水楼は「開業明治二十三年 和風二階三十五室 泊二円以上 菊水 高畝町 館主岡本宇三郎」（要録, p42）で、三島氏の前掲書でも楠木の家紋に因んで菊水楼と命名⁶³⁾したと紹介されている。館主・岡本宇三郎（高畑町）は旅人宿兼料理▲60.22円、△177.00円（日韓上, p8）/客間35（要録, p42）。

③三笠山麓 武蔵野亭

武蔵野亭は1550頃「開業三百五十年前、和風二階建客間二十六、宿料一円半、二円、三円 和洋料理応求 奈良三笠山麓春日野町 武蔵野 館主梶竹治郎（長電話二十番 停車場ヨリ人車二十三銭）」（要録, p42）であった。明治14年刊行の『マレーハンドブック』初版には奈良のホテル・旅館として「武蔵野、印判屋、小刀屋」⁶⁵⁾、明治24年刊行の『マレーハンドブック』3版には奈良のホテル・旅館として「武蔵野（半洋風）、角屋（半洋風）」⁶⁶⁾が挙げられており、古都奈良を訪れる外人向に半洋風に改造され、「客室は四季を通じて眺望最も宜敷く閑静にして調理新鮮器物清潔」⁶⁷⁾を謳っていた。館主・武蔵屋 梶幸三郎（春日野町）は▲20.00円、△30.00円（日韓上, p8）であったが、梶幸三郎から梶竹治郎に相続された後、蚊帳卸の勝村直治郎や奈良新聞社主らが洋式の「奈良ホテルに対立すべき日本旅館…模範的现代旅館を実現せしめ、改良の先駆とせん」（T12.2.19 奈良②）ことを標榜し大正9年2月株式会社武蔵野を設立、休業中の旧武蔵野の復活を計り継承した。

(3) 金沢の老舗旅館

次に奈良と同様に戦災に遭わなかった古都・金沢を取り上げる。石川県内の収録旅館数が17館、うち金沢が「金沢市石浦町丹羽旅館事白山屋。片町大浦屋。十間町浅田屋。下堤町 雨夜又五郎。殿町竹田猶吉。十間町住吉屋」（p41）の6軒と多く、金沢市の紹介文が長く丁寧なのは、赤井直道が当地と何らかの地縁関係があることの反映かと推測される。

①十間町 浅田屋

萬治2（1659）年初代伊兵衛が加賀藩より中荷物の御用を命ぜられ、江戸三度飛脚として創業、慶応3（1867）年中荷物御用を返上し、十間町（現在地）に旅籠「浅田」を開業した⁶⁸⁾。

「宿料六十五銭以上 * A浅田屋」（要録 M44, p33）、館主・浅田正平（十間町）は▲56.21円、△25.35円（日韓下, p25）、現当主が客室5部屋の老舗料亭旅館「浅田屋」を継承、盛業中である。

②十間町 住吉屋旅館

創業寛永15（1638）年の住吉屋は江戸末期に尾張町から十間町に移転、▲18.90円、△18.33円（日韓下, p25）、現在「金沢で一番の老舗旅館」⁶⁹⁾を標榜する金沢市「すみよしや旅館」若女将はけやき一枚看板を示し、「加賀藩が関所を通るための通行証「手判」の交付を城下7軒の信用ある宿屋に代行させていた手判宿…7軒の宿のうち現存するのは同館だけ」⁷⁰⁾の由である。

③片町 大浦屋

大浦屋主の大浦ふく▲97.75円、△46.76円（日韓下, p25）、客間25（要録 M44, p33）/「金沢停車場ヨリ十三丁 県庁、師団、高等学校及諸官衛、会社ニ近接ス 金沢市片町 * A大浦屋

館主大浦谷喜代 電話百六十一番 開業寛永年間 和風二階建、客間二十五…」（要録 M44, p33）

④下堤町 雨夜又五郎

雨夜又五郎は▲ 44.90 円、△ 32.60 円（日韓下, p25）、客間 15（要録 M44, p33）/あまや「和風二階建客間十五Aあまや」（要録 M44, p33）

⑤殿町 竹田猶吉

▲ 22.07 円、△ 21.17 円（日韓下, p25）

⑥石浦町 丹羽旅館事白山屋

後半の 3 軒、特に⑥は類書等に全く情報が無いことから編者の赤井自身がかなり肌理細かく地元情報に通じていたことの証左ともなろう。

(4) 半洋式のリゾート旅館香岳楼（赤倉温泉）

紙面の制約上、1 軒のみ追加したい。明治 19 年 10 月信越線の開通工事を請負っていた鹿島組主の鹿島岩蔵は横浜の鼈甲商時代からの友人に紹介され「妙高山地獄谷ヨリ湧出スル無色透明ノ温泉ニシテ胃腸答児、子宮疾患レウマチス皮膚病等ニ特効アリ。又転地療養トシテハ脚気、脳充血、衰弱等ニ適ス（海拔二千五百尺）」（要録 M44, p90）という薬効ある赤倉温泉に遊んだ際、よほど気に入ったのであろうか、赤倉の前途に着目し名香山という地名から命名した近代旅館「香嶽楼」を建てた。「英国人コックを連れてきて西洋料理を提供したり、室料と食事代を別計算にするホテル式営業」⁷¹⁾を開始した岩蔵は軽井沢などの別荘地開発にも深く関わったりゾート開発の先駆者といえよう。浅間山麓に牧場を経営した北白川宮を始め、徳川家達、新潟県知事など高原好きの貴賓客が愛用したとはいえ、「近代企業の花形である“株式会社”の旅館が参入した」⁷²⁾経営成果は、筆者の分析した京都の嵐山三軒家の場合⁷³⁾よりも一段と低稼働・高コストを反映して相当に厳しいものがあつたかと推測される。早くも開業 6 年後の明治 25 年 7 月鹿島組は新聞に「温泉旅舎貸渡シ広告…香岳楼今回競争入札に附シ貸渡し候に付該営業希望の方は…鹿島組本店」（M25.7.14 読売④）までとの直営断念方針を公表しているからである。また元祖旅行家・野崎左文も「赤倉温泉…温泉宿は香嶽楼を第一等とし」⁷⁴⁾で推挙する一方、「此楼は先年売物に出でしと聞きしが今は誰の所有なるや知らず」⁷⁵⁾と注記する。遅くとも明治末期には「越後赤倉温泉（新潟県中頸城郡一本木新田）A 香嶽楼 館主栗橋すま」（要録 M44, p90）の手に渡り、鹿島組の手を離れたと見られる。

(5) 鉄道に関する詳細な記述の特異性

梅本塵山は寄稿「汽車賦」の文末で「快きかな汽車の旅、楽しきかな、汽車の旅」（p4）と鉄

道旅行を礼賛しているが、「旅行者に安心と、便宜を与へんため」(裏表紙) 鉄道に関する最新情報が掲載されている。

試みに発刊直前1年間の鉄道開通の官庁資料と照合して、同誌の記述内容の正確性を検証すれば、明治31年11月28日印刷当日に開通の野中軌道は「御殿場…此駅より須走へ二里余鉄道馬車の往復あり」(p53)と掲載されている。明治31年6月8日開通の阪鶴鉄道宝塚～有馬口は「有馬口 現時阪鶴鉄道の終点地なり」(p73)。明治31年5月6日開通の名古屋電気鉄道は「名古屋市…広小路は電気鉄道布設ありて其便も多し」(p57)。明治31年4月25日開通の豊川鉄道一ノ宮～新城は「新城 新城は豊川線現時の終点地なり」(p56)、明治31年3月7日開通の山陽鉄道徳山～三田尻は「三田尻停車場は現時山陽線の終点地にして三田尻馬関間は線路工事中なり」(p80)。明治31年2月5日長田町～上金石町3哩1鎖開通の金石馬車鉄道は「金沢市…特に金石鉄道馬車ありて金石港海水浴場に交通に便なり」(p40)、「上金石港…金沢市へ二里鉄道馬車の設あり」(p41)と詳しい。明治31年2月3日開通の成田鉄道滑川～佐原は「佐原町…現時成田線の終点地にして近時隆盛を来せり」(p19)とあり、「大中居士の实地視察」内容は相当に正確な内容と考えられる。官庁情報による野中軌道開通の時期と若干の齟齬があるが、この種の個人営業の馬車軌道の場合、無許可での営業開始が先行するケース⁷⁶⁾もありえよう。因みに「八代町九州鉄道現時の終点地」(p84)は明治29年11月21日松橋～八代が開通している。また明治26年4月1日横川～軽井沢の開通は旧聞ながら「横川 是れより碓氷峠線路急勾配となりアプト式鉄道以て往復す。又二十六ヶ所の隧道あり」(p15)ときわめて専門的な記述である。『大旅館雑誌』発行所主事たる「漫遊者大中居士の实地視察感悟に因て起稿」(裏表紙)した事実をある程度裏付けている。記載内容は「柏崎…長岡柏崎間は線路工事中なり」(p37)といった幹線・亜幹線はもとより、以下のように軽便鉄道、馬車鉄道、人車鉄道にも及んでいる。即ち「佐野町より越名葛生に通ずる軽便鉄道あり」(p12)、「前橋市…渋川、高崎及前橋等へ鉄道馬車発着す」(p13)、「伊香保麓渋川は馬車鉄道の発着繁し」(p14)、「土崎…秋田市へ一里鉄道馬車あり」(p32)、「国府津 小田原、湯本へ馬車鉄道あり、箱根熱海温泉行きの旅客は此駅にて下車あるべし」(p53)、「鈴川…吉原大宮町に通ずる馬車鉄道ありて其便多し」(p55)などと述べている。なかでも珍しい人車鉄道は本文で「熱海温泉場 小田原町字早川口より豆相人車鉄道発着す。此間線路海に沿ひ絶景のヶ所夥し」(p53)と紹介するだけでなく、巻末にも豆相人車鉄道の一頁広告「人車鉄道の案内」(p105)を置いた。即ち同社は「車体は構造美麗にして進行中動揺少なく…操縦する車丁は…巧妙殆と神に入る」などと専ら安全を宣伝した。しかし実態はとても快適とは言えぬ代物で、「愚昧の輩は往々悪評を流し本社の営業を妨んと企つるものあり」、こうした風評被害払拭のため一頁広告で縷々弁明を必要としたのであろう。

ここまでは一応旅客営業を行う鉄道・軌道の範疇に属するが、大中居士の实地視察は以下のように広く自家用の専用鉄道・軌道にも及んでいる。この種の特種鉄道の情報を「専用鉄道規則」

が施行された明治33年8月10日以前の明治31年時点で包括的に入手することは「自家用鉄道」（翌年以降「専用鉄道」に変更）の項目が掲載されるのが『明治三十二年度鉄道局年報』⁷⁷⁾からというように容易ではない。したがって彼が実際に現地を訪れてこの種の専門的情報を入手するなど、今日的な意味での「鉄道愛好者」の魁であった可能性も示唆するようである。「足尾町 足尾鉾山は著名にして日光町より行程五里貨車運搬のレール設置ありて其便夥し」（p11）、「湯本停車場は小野田及白水炭礦の石炭は此駅に運搬なせり」（p22）、「鹿港 台中を去る六里…此間貨車運搬のレールの敷地あり運搬の便利あり」（p97）、「大野町…又三菱会社の所有たる面谷鉾山は此地より車馬交通を便にして運送貨物の取扱をなせり」（p43）

こうした鉄道に関する詳細にして特異な記述は恐らく大中居士の個人的趣味嗜好によるもので、一般性を欠いていたためでもあろうか、少なくとも筆者が閲覧・入手して中味を対照できた『旅行独案内』13号では全面的にカットされ、巻末「各地人力車及び電気鉄道其他賃金表」⁷⁸⁾に都市部・近郊の一部が移行、本文では僅かに軽井沢の項目でアプト式が残るほかは交通未発達台湾の項目で「塗葛窟…此地より台中まで七里軽便鉄道の便あり」（p36）程度にとどまっている。先学・山本光正氏は「鉄道の導入により…旅程に関する案内書は仕切り直しになった…ため草創期の沿線案内の著者たちも旅客が何を求めているかをかみ切れない」⁷⁹⁾ものと解しているが、筆者は初版の編者赤井直道の個人的な趣味嗜好に基づく偏向であったと考えられる。なお豆相人車鉄道の巻末一頁広告は継続されている。

むすび

本稿では同様に旅館案内を目的とする冊子の発行体として結成順に①一新講社、②大日本旅館改良組、③日本同盟大旅館会（『大旅館雑誌』）の3団体を取り上げ、構成員たる主要旅館と中心人物の解明を限られた資料の中で試みた。発足した時代を反映して、3団体の趣旨、発行する冊子の性格には相違があり、とりわけ街道、鉄道との関係において3団体の差は顕著である。

即ち東海道筋の旅籠の主人により提唱され明治6年頃結成された一新講社の場合は京浜間鉄道のみ開通していたとはいえ、鉄道網の皆無な時期における街道沿の旅人宿の結合組織である意味で近世の講社形態をそのまま踏襲する古いタイプの結社の事例であった。

これに対して明治25年6月ごろ旧勢力に対抗する形で結成された改良組は幹線鉄道網が着々形成され始める鉄道黎明期の産物で、鉄道の将来性に着目した鋭敏な旅館主は旧街道沿いの繁華な地にある本店とは別に、まだ相対的に辺鄙な新興地たる駅前に支店を配置⁸⁰⁾する時期に相当する。幹線鉄道たる日本鉄道の線路網に沿った旅館のネットワーク・改良組が上野駅・仙台駅の駅前旅館主を首領に、時刻表に名簿を掲載し、優待乗車券を配布し、回遊列車運行を企画するなど、

鉄道と運命共同体を結成したといっても過言ではなからう。

最後に明治29年5月ころ結成された日本同盟大旅館会の性格は十分に解明出来なかったが、少なくとも改良組の場合以上に鉄道網との連携が緊密であったことは随所に窺えた。特に明治31年10月発行した『大旅館雑誌』創刊号はその一ヶ月前に、同一団体から時刻表『旅行独案内』⁸¹⁾が創刊されたことから判断すれば、元來時刻表の姉妹編ないし別冊特集といった性格を有するものと想定されよう。本務たる鉄道の時刻表編纂に関与したスタッフ・編集者らが製作した『大旅館雑誌』掲載の鉄道運行情報が前述の通り正確かつ微細な理由も肯ける。

筆者は本『マネジメント学部研究紀要』に投稿させて頂く機会も本稿が最後となるので、平成20年の第6号以来これまでの投稿論文の「むすび」という名目で今回若干の蛇足を弄することを大目に見て頂きたい。

本稿は老舗旅館を掲載した旅館案内を取り上げたため、期せずしてこれまで本誌等に特色ある経営方針等を掲載した個別旅館の相対的な位置づけを一覧する一助となった。また本学より毎年研究費等を交付され専ら貴重史料等の購入に充てて来た身として、せめて入手出来た資料の一端なりとも本誌で紹介すべき責務があらうかと思考したからである。特に筆者は限りある研究費等の投入先として一点物の歴史的史料（多くは非刊行物で定価なし）等の現地古書店からの購入を最優先した結果、某外資系のネット一括発注の場合とは比較出来ない手間暇を関係職員各位にお掛けした引け目もある。思い返せば“高価”な「長谷寺牡丹絵葉書」「武蔵野鉄道開業記念絵葉書」⁸²⁾等を購入した際に大学当局より呼び出され、筆者の教育研究活動との関係を説明したこともあり、今回提示の高額購入品も「調達依頼書」に必要理由を詳しく述べる必要があった。家業である旅館業等の解明に不可欠と感じて購入した資料等が筆者の乏しい観光史研究に聊かなりとも寄与した事実を本稿で審らかに出来れば幸いである。

注

- 1) 『明治二十九年改正 一新講社』江戸屋長蔵改良組東北部。
- 2) 『明治二十九年撰定 大日本旅館改良組』。
- 3) 今井金吾『道中記集成』別巻3、大空社、平成10年を単に今井別3、p221と略したように、本稿では基本文献、頻出資料・新聞等について以下のような略号を用いた。

略史…『日本ホテル略史』鉄道省観光課、昭和22年、大島…大島延次郎『日本交通史概論』吉川弘文館、昭和39年、界隈…青木助三郎『駅前界隈八十年』文芸東北新社、昭和54年、今井44…今井金吾『道中記集成』第44巻、大空社、平成9年、今井…今井金吾『江戸の旅風俗』大空社、平成9年、一新M21…『明治二十一年改正 一新講社』相州箱根湯元福住九蔵、一新M29…『明治二十九年改正 一新講社』江戸屋長蔵改良組東北部 M25…鈴木誠三郎『東北本線の時刻表及料金表』大日本旅館改良組東北部、明治25年7月、改良M29…『明治二十九年撰定 大日本旅館改良組』、線路…桜井純一（日鉄

明治中期各種旅館連合による旅館案内の系譜と推進者

- 社員) 編『日本鉄道線路案内記』博文館、明治 35 年、一新 T5…『大正五年改正 一新講社』、旅館案内…河野鏡洲編輯『旅行便覧全国旅館案内』全国旅館案内編纂事務所、大正 5 年、旅館名簿…全国同盟旅館協会編『全国旅館名簿』神田屋商店出版部、大正 15 年、旅館名鑑…昭和 5 年版『全国都市名勝温泉旅館名鑑』日本遊覧旅行社、昭和 5 年 8 月、商…『日本全国商工人名録』明治 31 年、日韓上…『日韓商工人名録』実業興信所、明治 41 年、要録…『旅館要録』東京人事興信所、明治 44 年、諸…『日本全国諸会社役員録』商業興信所、帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所、大鑑…『京都商工大鑑』帝国興信所、昭和 3 年、東朝…東京朝日新聞、読売…読売新聞
- 4) 著名旅館好友会・オール旅行社『旅館案内』旅館案内社、昭和 15 年、p22
 - 5) 先人の苦難の旅とは程遠い気楽なものながら、筆者自身の 50 年前の鉄道旅・船旅の感想は本誌 23～24 号(平成 29 年 1 月、7 月)掲載の拙稿参照。
 - 6) 筆者の最初の勤務先・日本生命には全国に信者・講員を有する「多賀講社に着想した多賀(寿)生命が起源」との古来の伝承があり、同社百周年に際して社史編纂室長を拝命、多賀大社に参拝し、日誌の神楽記録に弘世の名を見出したり社務所に厳然と掲げられた「多賀講社」の看板を拝見、講規則の相互扶助条項を確認するなど真偽の解明を試みたものの確たる証拠史料を得られず、結局肯定・否定とも果たせなかった経緯がある。多賀の熱心な信者であり幕末には近江商人として街道を往来した創案・創立者たる弘世助三郎が狭い地域社会の枠内で当初形態の「近江生命」等を密かに着想した際、後発者・第一生命の矢野恒太のようにドイツに留学した学識もないので、自己の身近に存在した多賀講の坊人(御師)や他国商いを旨とする近江商人も享受してきた常宿講の仕組みを共済思想の原点や全国各地に広めて行くべき保険募集組織の拡充のヒントにした可能性は完全否定出来ないようにも思われる。
 - 7) 「旅店新築落成広告」(藤金旅館 HP)。「藤金旅館の屋号は、初代館主「遠藤金治」の二文字を取り藤金としたのが由来。現在の藤金旅館の基礎を築いた初代館主遠藤金治は当初、上町(現在の福島市上町)の地にてたばこ雑貨販売の店を構え、天秤棒を…金治は全国一新講社奥州取締役(現在の県旅連理事長職のようなもの)として、東京上野駅前前の群玉舎に上京することがたびたびあり」(WEB「福島県福島市のお宿 旅館藤金のこれまでの歴史と歩み」www.fujikinryokan.com/ayumi.stm)とある。
 - 8) 山本光正「旅行案内書の成立と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 155 集、2010 年 3 月、p109。
 - 9) 明治 13 年立山講社が発行した『立山案内図』の如く、当該施設の運営者等が単独で随時、不定期に簡易な印刷物として発行。多くは絵葉書、案内用地図、当該路線・駅みの時刻表、引札、チラシ、せいぜい小冊子程度のため、当該業者自体も保存せず、かつ図書館等が史料と認識して収集・保管する慣行もないため、全容の解明は極めて困難。
 - 10) 「木曾路にも明治四五年五月には鉄道が開通しており、わずかに木曾路に余喘を保っていた一新講社も、大正に入ると遂に姿を消さざるを得なくなり、ここに江戸以来の旅の在り方は終焉を迎えるにいたったのである」(今井別 3、p199)。
 - 11) 拙稿「私鉄『沿線案内』変遷史(1)(2)」『鉄道ジャーナル』198 号、p131～135、199 号、p128～131、昭和 58 年 8～9 月。
 - 12) 東海道の宿場「興津清見湯 一碧楼水口屋 電話六番 特長二三番」東海道興津宿「興津 泊 風景

ヨシ 水口屋半十郎（『諸国道中袖鑑』明治9年）「おきつ 田子の浦三保の松原富士山見えます 清見寺 水口屋半十郎 府中や与四郎」（『一新講社道中記』功力孝、明治13年2月）

- 13) 本多留平編『一新講社諸国道中袖鑑』東生亀治郎、1876年。
本田屋留平（袋井）、『諸国道中袖鑑』明治9年、奥付、「袋井 中ほど 本田や留平」『一新講社道中記』功力孝、明治13年2月）
- 14) 高島藍泉著、落合芳幾画『東京日日新聞 566号、毎日新聞社・新屋文庫所蔵。
- 15) 小田原馬車鉄道发起人、小田原電気鉄道取締役など福住の多彩な地域貢献上の功績に関しては拙稿「箱根の遊園地・観光鉄道創設を誘発した観光特化型“不動産ファンド”—福原有信・帝国生命による小田原電気鉄道支援策を中心に—」『彦根論叢』第387号、平成22年3月参照。
- 16) 清水市次郎『箱根温泉誌』尚古堂、明治20年、p4。
- 17) 箱根温泉旅館共同組合編『箱根温泉史』昭和61年、p130。
- 18) 苦楽道人「旅宿の改良に就て」（M35.9.13日出②）。苦楽道人は「余輩今夏関東地方漫遊の折、茶代廃止同盟会に加入せる旅宿に投じたることあるに…箱根湯本の福住旅館は真に能く茶代廃止の実を行ふものなり。同旅館は客の投ずるや、先づ便宜の客室に案内し、直ちに一片の印刷物を提供す。之を読めば茶代及土産物等を一切申受けざること、並びに各等に於ける旅籠料、客室の席料を記し、其他休泊に於ける要件を掲げあり。旅客の注意を惹くもの少しとせず。而して同旅館は建築の善美なるのみならず、盥漱場、浴場、便所等に於ける設備の清潔にして用意の行届ける、其他余輩の意に合するもの間々あり。尤も温泉と水の清冽なると將た山に対し川に臨む景色等は人為を以て容易に得べからずと雖、其他の設備に至ては、人為を以て成したるものなりとす。蓋し同旅館は日本風旅宿の模範として不可なかるべし。されば余輩は旅宿営業者に向つて、福住旅館其他設備の行届きたる旅館の実況を視察して以て各地互に改良を施し、旅客をして百事便利に且愉快を感じしめんことを勧告するなり」（苦楽道人「旅宿の改良に就て」M35.9.13日出②）。一片の印刷物とは「国立公園箱根温泉御案内 茶代廃止福住旅館」「御案内 宿泊料規定 福住旅館」（壱等 弐等 参等）など。
- 19) 20) WEB「福島県福島市のお宿 旅館藤金のこれまでの歴史と歩み」（www.fujikinryokan.com/ayumi.stm）
- 21) 瀬川光行『日本之名勝』史伝編纂所、明治33年、98コマ（頁付なし）。
- 22) 「『群玉舎』はお上りさん専門の下谷の大旅館。よく『群玉舎』と太文字でしたためた番傘さして、宿屋のどてら着た 赤毛布たちが上野駅付近をうろうろしてゐた」（正岡容『東京恋慕帖』好江書房、昭和23年、平成16年復刻版、p53）。
- 23) 大宮司雅之輔は拙稿「日本三景・松島の観光振興と旅館経営者—大宮司雅之輔による観光鉄道への関与を中心として」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第9号、平成22年3月参照。
- 24) 34) 大泉は拙稿「松島回遊列車旅行を主催した“観光デザイナー”—和風旅館・洋式ホテル・駅構内食堂・列車食堂等の総合経営者・大泉梅次郎を中心に—」 単著 『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第16号、平成25年7月参照。
- 25) 「東北本線の時刻表及び料金表」明治25年7月16日出版 発行編輯兼印刷者：鈴木誠三郎、大日本

明治中期各種旅館連合による旅館案内の系譜と推進者

- 旅館改良組東北部印刷所 仙台市北櫓町7番地 (WEB 郷家の歴史 日光東照宮「旅枕」(2) 2015/02/05)
- 26) <http://www-moaej.shinshu-u.ac.jp/?p=687>。
 - 27) 「新潟県改良組乗車券」(2. 127-福地書店 www.fukuchishoten.com/blog/archives/category/.../127)
 - 28) 明治32年7月「東京各旅人宿改良大懇親会 明五日上野梅川楼に開く」(32.7.4 読売②) など。
 - 29) 『風俗画報』明治41年1月号第378巻, p20。
 - 30) 31) 桜井純一『日本鉄道線路案内記』博文館、案内記』明治35年, p28。
 - 32) 37) 『現代人名辞典』ト之部, p24。「上野停車場前…旅人宿山城屋支店は三階の大建物」(M28.11.28 読売③)であったが明治28年11月下谷の失火で井筒屋、小松屋、岡野等と類焼した。明治35年9月「日本橋区馬喰町二丁目 山城屋彌市本店は今回新築落成と共に器具其他一切新規調製仕候 料理最新鮮」火災後の明治41年9月「増築落成(41.9.14 読売③)広告)
 - 33) 35) 38) 武籐頼母『現代人物史』中外新聞社、明治45年, p272。
 - 36) 富坂保次郎の実父の山城屋遠藤弥市は『新古文林』1(8)、近事画報社、明治38年11月参照。
 - 39) 榎田民蔵が東京外語在学中の明治40年1月作成した『宿所姓名録』(『榎田民蔵・日記と書簡』社会主義協会出版局、昭和59年, p100所収)に榎田の「漢学の師」「金沢市茶木町七十五 赤井直好」の在京住所を記載。
 - 40) 文久3年1月生まれの長男直忠は本郷区本郷4-8の「地に赤井小児科医院を開設し現に其院長」(古林亀治郎『現代人名辞典』中央通信社、大正元年、ア, p33)。明治7年5月生まれの三男直好は東京帝大漢文科を卒業し金沢の第四高等学校教授となり陽明学を研究、「生徒の世話をよくすることで生徒間に評判がよい。金沢の近郊に色々の碑文を書いて、いかにもお得意さう」(『全国上級学校大観』欧文社、昭和13年11月, p45)、明治41年1月生れの孫・直恭(直好の長男)は朝日新聞記者(『人事興信録』昭和28年, あ p26)。なお室生犀星の義兄・赤井真道(金沢地裁勤務)(『石川百年史』, p691)との関係の有無未詳。
 - 41) 「松園」について「松園といふは安政の頃朽木昌綱編「西洋錢譜」を抜萃して刊行し、又「海防彙議」を編述した塩田順庵[泰、号松園]であらう、此人は幕府の末の学医である」(「明治前後日欧文学の関係 [上]」『明治文化』第六卷第二号[明治文化研究会、日本評論社、昭和5年]とする渡辺修二郎の説は「誤り」(web「歴史の文字 記載・活字・活版」東京大学 (umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DPastExh/Publish_db/1996Moji/05/5800.html) との指摘もある。
 - 42) 梅本塵山「川柳作者と狂歌作者」『武蔵野』21巻10号、昭和9年10月15日、「明治の投書家」『本道楽』第108号、昭和10年4月1日等を執筆。川柳、狂歌に造詣深く、相当な読書家か。
 - 43) 「相馬町 日本同盟大旅館 中村町大町五丁目最上屋」(13号, 特 p3)は「一頁を十行に画し一行金八十銭」(13号, 後附 p4)を支払って「旅館特別広告」を掲載しており、同盟との関係を継続させていた。
 - 44) 「宿料八十銭以上A駅前 若六」(要録 M44)、「宿料七十銭、二円相生町 B 千秋樓」(要録 M44)
 - 45) 同館は長野「停車場前 五明館支店、同対旭館支店、大門町扇屋事 五明館、同 藤屋事 対旭館、県町近山事 犀北館」(p15)と紹介されており、『旅行独案内』の巻末の「本誌定価」規約では「十銭」

- (13号, 後附 p4) で日本同盟大旅館会に経営者の藤屋(藤井)平五郎が加盟し、対旭館に送付されたものであろう。
- 46) 『旅行独案内』の場合も「定価8銭だが、同盟旅館が購入の場合は、100部以上1冊6銭に割引した」(松尾定行・三宅俊彦『時刻表百年史』新潮文庫、昭和61年, p21) 由。
- 47) 「宮島 岩惣旅館 紅葉谷 長電3, 25, 26番/安政元年(1854)」 「宮嶋紅葉谷 岩惣」
- 48) 「神富殖産会社資料」「日本同盟大旅館主意書」明治29年5月(三重県総合博物館蔵)。
- 49) 前掲時刻表百年史, p21。
- 50) 51) 大正4年2月号の『公認汽車汽船旅行案内』, p33, p32。
- 52) 初瀬町井谷屋…「牡丹の植栽・夜間点灯による“観光まちづくり”一門前町・初瀬の観光マネジメントと観光カリスマ・森永規六の尽力」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』8号、平成21年9月、松島観月楼・松島ホテル(大宮司雅之輔)…「日本三景・松島の観光振興と旅館経営者一大宮司雅之輔による観光鉄道への関与を中心として」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第9号、平成22年3月、城崎温泉西村屋(西村佐兵衛)…「企業の観光デザインと地域デザインとの緊張・相剋一城崎の温泉慣行を侵蝕し敗れた城崎温泉土地建物の事例一」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第15号、平成25年3月、『観光デザインとコミュニティデザイン—地域融合型観光ビジネスモデルの創造者“観光デザイナー”一』日本経済評論社、山中温泉吉野屋(中曾根治郎)…「加賀の名門“横山財閥”の企業統治能力—横山章・俊二郎兄弟の地元私鉄関与を中心の一」『彦根論叢』平成30年8月、柘屋(西村庄五郎)…「企業勃興期における京都観光資本家の目論見と違算—料亭・嵐山三軒家株式会社の発起を中心の一」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第11号、平成22年3月、「京都人の温泉への憧憬を鼓舞した京都鉱泉の虚構と地域社会の落胆—新たな観光コミュニティ理論構築への試論一」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第19号、平成26年3月、福住旅館(福住九蔵)…前掲「箱根の遊園地・観光鉄道創設を誘発した観光特化型“不動産ファンド”」、黒田原温泉…「温泉会社の源泉リスクと観光資本家—遠距離引湯の廃絶例を中心の一」『彦根論叢』第386号、平成22年12月、熱海露香館・万千楼ほか…「兩宮敬次郎」小池滋・青木栄一・和久田康雄編『日本の鉄道をつくった人たち』、悠書館、平成22年参照。
- 53) 春阿弥は、1877年に温泉場となり、1906年に焼失した。
- 54) 「明治六年の創設に係り前庭に泉石を畳み浴場其他の室房尽く洋風に模擬し、頗る美麗を極む…此鉱泉の下方及び北方に数軒の旅館、割烹店及び貸席ある」(野崎左文『日本名勝地誌第一編』明治34年、博文館, p51) と紹介されている。
- 55) 「京都 料亭 左阿彌—歴史・由来」(www.saami.jp/history/index.html)。
- 56) 野崎左文『漫遊案内』明治30年7月, p199。
- 57) 『日本ホテル略史』運輸省、昭和22年, p16。
- 58) 59) 『京都ホテル100年ものがたり』京都ホテル、昭和63年, p149, 200。
- 60) 61) 大沢善助述『回顧七十五年』昭和4年, p120~p121。
- 62) 63) 三島康雄『奈良の老舗物語』奈良新聞社、平成11年, p169, 155。

明治中期各種旅館連合による旅館案内の系譜と推進者

- 64) 『諸国道中袖鑑』明治9年。
- 65) 66) 重松敦雄『ホテル物語』, p18, p21。
- 67) 『大和人名鑑』明治44年, p80。
- 68) 「企業紹介株式会社浅田屋」『北陸経済研究』平成7年4月, p66。
- 69) 「すみよしや旅館」金沢市旅館ホテル協同組合 (<https://www.yadotime.jp/japaneseinn/sumiyoshiya>)。
- 70) 「ISICO お店ばたけプラスブログ: お店探訪記アーカイブ」(www3.omisebatake-isico.com/blog/tanbohki/index_4.html)。
- 71) 「鹿島岩蔵 激動の明治を生きた実業家」(https://www.kajima.co.jp/news/digest/mar_2011/feature/ken_kai/index-j.html)。
- 72) 赤倉温泉 香嶽楼 HP
<https://www.myoko-kougakuro.jp/>。
- 73) 京都の嵐山三軒家は拙稿「企業勃興期における京都観光資本家の目論見と違算一料亭・嵐山三軒家株式会社の発起を中心に」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第11号、平成22年3月参照。
- 74) 75) 野崎左文『漫遊案内』明治30年7月, p410。
- 76) 77) 拙著『非日常の観光社会学—森林鉄道・旅の虚構性—』日本経済評論社、平成29年, p120, 196。
- 78) 『旅行独案内』13号, p41~43。豆相と小田原以外は京浜間で、地方は不記載。
- 79) 前掲山本, p130。
- 80) 大泉は東北本線が仙台まで開通した明治20年積極的に鉄道へ接近して駅前に進出、約千坪の土地を確保し、23年切妻造二階建の大泉支店を開業した。(協会, p56)
- 81) 三宅コレクション、松尾定行・三宅俊彦『時刻表百年史』新潮文庫、昭和61年, p21 所収。
- 82) 別稿を『FD ジャーナル』に予定している。

